

対島周辺海域のヤリイカ産卵生態調査

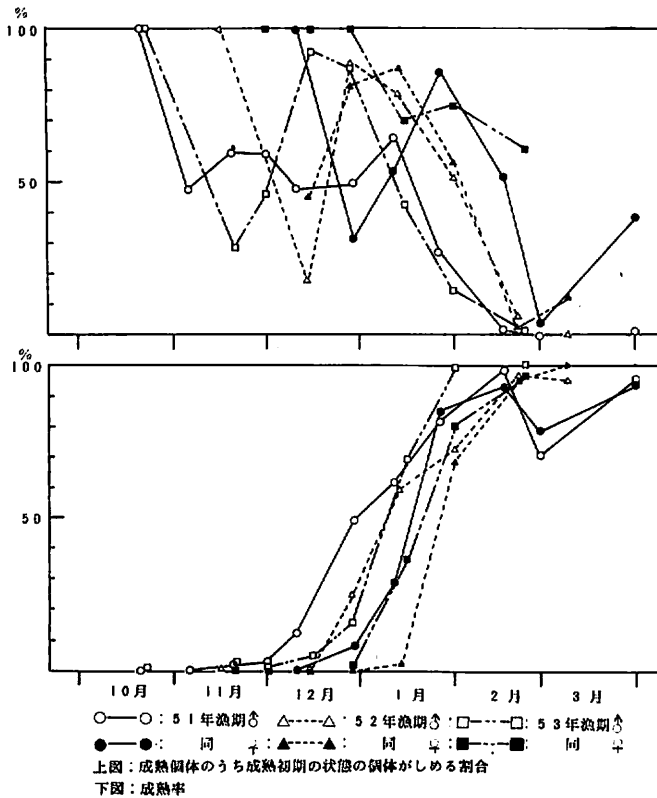
田中伸和

ヤリイカは本邦沿岸各地に広く分布している。この種は日本海西南海域においては対馬周辺を主漁場とする沖合底曳網漁業（以下沖底とする）の主要漁獲物であり、また、冬期山陰沿岸での小型漁船の抄網による対象種でもある。

筆者はさきに産卵回数とそのための活力の補給源について報告したが、今回は沖底の生物測定調査を主に、産卵魚礁の調査、定置観測記録等の結果から産卵生態、特にその産卵期の推定をおこなったので、その概要について述べる。

1. 成熟は雄性先熟の傾向がみられ、雌雄とも12月以降急激に進んでいる。

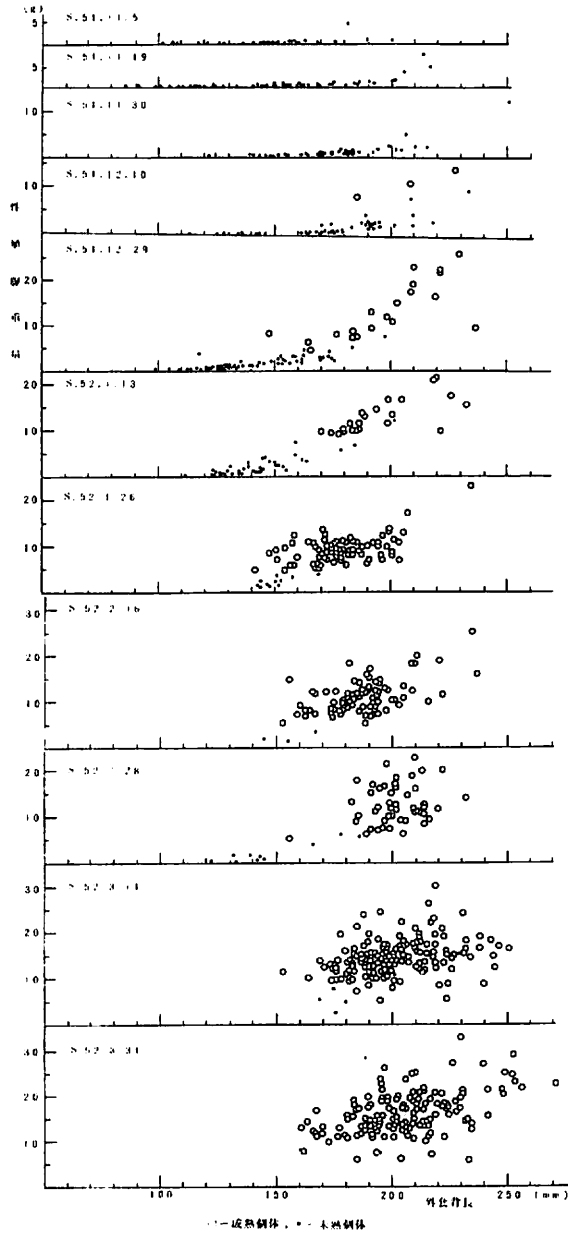
1月下旬以降の成熟率は雌雄ともほぼ同程度となり、2月中旬にはほぼ全ての個体が成熟する（図1）。



第1図 成熟率の月変化

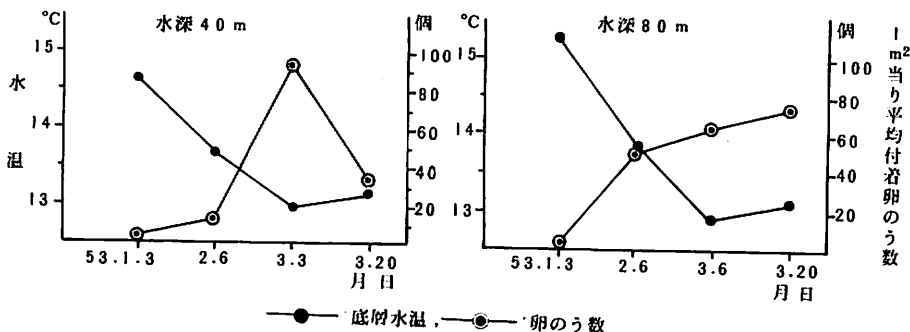
2. 雌の性殖腺重量は11月までは外套背長の大小に関係なく低い値をとるが、12月下旬には大型個体から成熟が進み、成熟個体数の増加がみられる。

1月下旬には小型個体でも重量は重くなり、2月中下旬以降はほぼ全個体が成熟し外套背長との相関がなくなる(図2)



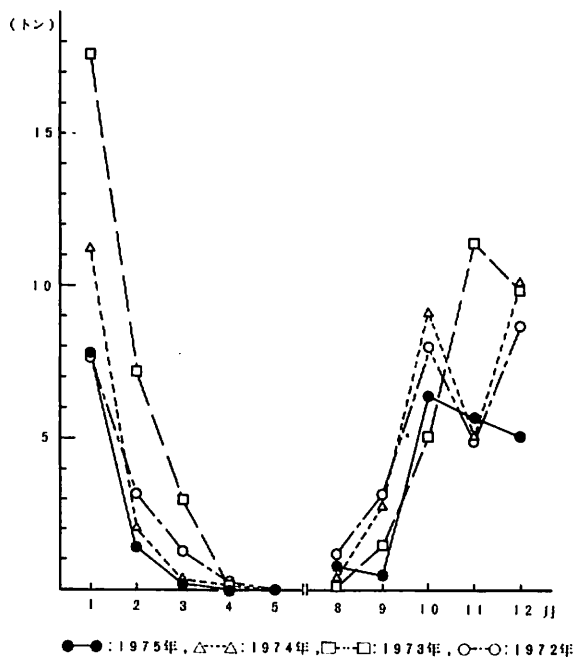
第2図 ヤリイカ雌の外套背長と性殖腺重量の関係の月変化

3. ヤリイカ産卵魚礁の付着卵のう数は1月以降水温の下降にともなって増加し、3月上旬の最低期水温13℃前後で最も多くなる。したがって、15℃付近で産卵が行われ13℃付近でピークとなりそれ以降水温の上昇にともなって減少する傾向がみられる(図3)。



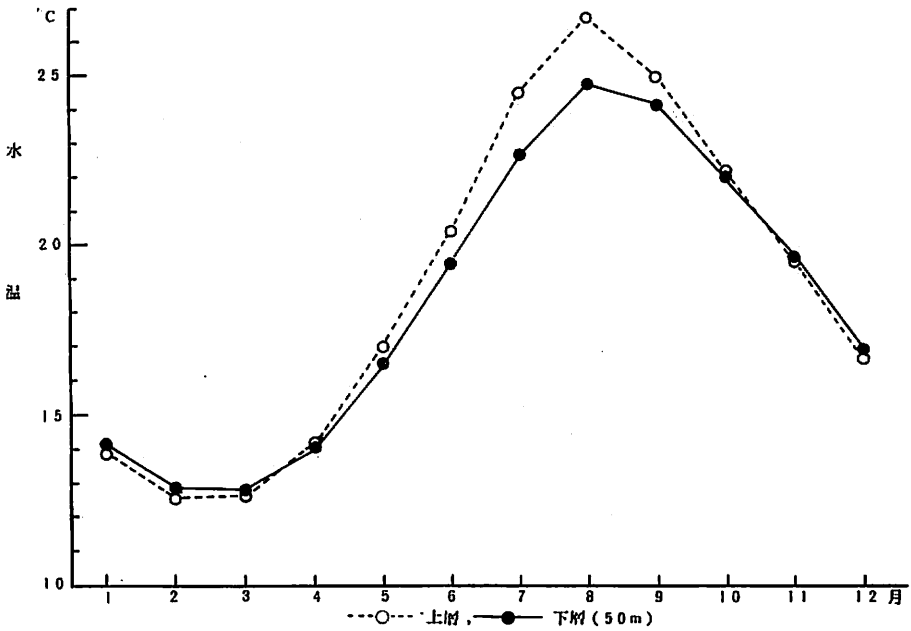
第3図 魚礁設置場所における水温と魚礁1㎡当り平均付着卵のう数の推移

4. 沖底で漁獲されるヤリイカは10月から1月にかけて漁獲量ももっとも多く、2月以降急激に減少している。これは本種が産卵のため沖底の漁場から沿岸へ移動することにより産卵盛期以降はほとんど漁獲がなくなるものと推察される(図4)



第4図 入港統数当りのヤリイカ月別漁獲量

5. 大正8年から昭和43年までの49年間の浜田湾馬島における平均水温を示したが、冬期の水温は13℃前後となっている(図5)。



第5図 馬島定点の平均水温の月変化(大正8年~昭和43年)

以上の結果からはほぼ12月下旬から4月下旬まで産卵が行われ、その盛期は2月中旬から3月中旬までと推定される。